

ピエロ・デッラ・フランチェスカ《モンテフェルトロ祭壇画》
ーウルビーノ公とフランチェスコ会厳修派の関係性を中心にー
杉山太郎 (京都大学)

ピエロ・デッラ・フランチェスカ (1412 頃-1492) は、マルケ地方の宮廷都市ウルビーノの君主フェデリーコ・ダ・モンテフェルトロ (1422-1482) の注文によって、《モンテフェルトロ祭壇画》(ブレラ絵画館) を制作した。文書記録の不足から、制作年や制作目的をめぐる議論はいまだ決着していない。また、本作は、16 世紀前半には、ウルビーノ郊外に建つフランチェスコ会厳修派のサン・ベルナルディーノ教会主祭壇を飾っていたが、先行研究においては専ら宮廷芸術の文脈にのみ位置付けられてきた。対して本発表では、基礎情報に対する提言を行いつつ、作品の成立背景に、フェデリーコの意向のみならず、厳修派集団の対外的態度が併存することを明らかにする。

発表ではまず、ピエロの活動に関する最新の見解 (Banker 2014) 及び、修復作業に伴う科学調査の成果 (Daffra, Trevisani 1997) を参照し、1475-77 年の制作年推定を補強する。その上で、フェデリーコによる領地内の厳修派への多大なパトロネージを取り上げる。彼は、厳修派のためにサン・ベルナルディーノ教会建設に出資した。フェデリーコの死後に完成した同教会は彼の墓所となり、主祭壇の近くに遺体が埋葬された。こうした事実から、本作は、新教会の祭壇画需要に応え、かつ、死後の救済と主権の存続を願う専制君主の墓碑画の要素を重ね持つことを指摘する。

加えて、厳修派への着眼は、聖人選択の問題の解決に寄与する。画中では、フランチェスコ会聖人の聖ベルナルディーノ (1388-1444) と、異端審問官であったドメニコ会聖人の殉教者聖ペトルス (1205 頃-1252) が対置されている。1470 年代は二大托鉢修道会の対立が激化した時期であったにもかかわらず、両聖人が「聖会話」の中に同時に選ばれた要因については説明されていない。そこで本発表は、他のフランチェスコ会美術を確認し、異なる会派の聖人図像が、政治的理由から混在し得る作例を示す。特に、15 世紀のフランチェスコ会内部では、厳修派による教団改革運動が興っていた。聖ベルナルディーノは運動の中心人物であり、サン・ベルナルディーノ教会も彼に捧げられた教会だが、その説教方法が問題となり異端嫌疑をかけられることがあった。そして、当時の教皇シクトゥス四世が厳修派を抑圧する政策を主導していた点を踏まえ、台頭期の厳修派は聖ベルナルディーノの正統性の承認を求めていることを論証する。これにより、本作では、ドメニコ会の聖ペトルスに、逆説的にその視覚的役割が与えられたという新たな理解を提示する。

フランチェスコ会厳修派にも焦点を当てる以上の議論は、従来強調されてきた《モンテフェルトロ祭壇画》の宮廷的性格を相対化するものであり、本作には、フェデリーコの私的・公的願望と並んで、厳修派による自己宣伝が共に内在されていると結論付けられる。